第四号　平成十二年十一月九日（木）発行

豆が煮えない時、「作左が来るぞ」と聞くと、恐ろしさのため煮物の豆でさえ早く煮えたというほどの本多作左衛門。実は、作左衛門と主君徳川家康は、強い信頼関係で結ばれていたことが分かるお話があります。

天正十二年（一五八四年）明智光秀が本能寺で織田信長を殺し、その光秀も、山崎で豊臣秀吉に討たれるというように、世の中は、めまぐるしく動いていました。そんな時、これまで病気らしい病気をしたことのない家康は、「家康が死んだ」と、うわさがたつほどの病にかかってしまいました。たちの悪いはれ者のため、家康の体は、薄紫色に変わってしまいました。

「これは死ぬかも知れぬ。」四十度をこす熱のため、もだえ苦しむ家康を見て、作左衛門は思いました。なんとしても家康を助けたかったのです。石川家成らが灸のような荒治療では、家康の体が持つまいと、強く反対するのを、

「だまらっしゃいっ。」

と、はねつけ、作左衛門かかりつけの医者の長閑を呼びました。

しかし、作左衛門にとっても自信はありませんでした。長閑がもぐさを患部にもりあげ、線香で火を移すのをじっと見守っています。それでも家康の体は、びくりともしません。一時間、二時間・・・。時ばかりが過ぎていきます。

作左衛門は、固く握りしめたこぶしをひざに立てたままの姿です。あたかもろう人形がすわっているかのように、家康の体に吸いつけられた作左衛門の目は、青ざめた顔の中でまばたきひとつしませんでした。

四時間ほどたったころ、「ううむ」と、家康がかすかな声をあげました。

「助かった。」

作左衛門は、おもわず叫んでしまいました。その目からは、うれし涙がとめどもなくあふれ落ちていたということです。

家康は、自分のために一生懸命に働いてくれる。そんな作左衛門を家康は、心から信頼していたんではないでしょうか。人間って、信頼関係が大切ですね。

（参考文献『岡崎の歴史物語』）